

水稲時期別技術対策情報 22-1

平成22年4月12日
新潟県農林水産部

育苗期～本田初期の栽培管理のポイント

- 1 晴天時は育苗ハウス内の換気を徹底し、苗ヤケや徒長を防止
- 2 前年に倒伏の大きかったほ場では、基肥窒素を減量
- 3 除草剤等の農薬散布時は、処理後7日間の止水を徹底
- 4 いもち病多発地域のコシヒカリBLは育苗箱施用剤等による葉いもち1回防除、わたぼうし等は予防粒剤による葉いもち防除を徹底

1 育苗期の管理

- (1) 新潟地方气象台(4月9日発表)によると、4月14日頃からの約1週間は、気温が平年よりかなり低くなる確率が30%以上となっている。無加温で出芽中、または緑化中の苗は、最低温度が10℃以下にならないよう、被覆資材の追加や暖房等による保温対策を実施する。

天候回復後、晴天時にはハウス内の気温が急激に上昇するので、換気に努めて苗ヤケや徒長を防止する。

- (2) 緑化及び硬化期の高温、過湿は細菌性病害の発病を助長するので、緑化期の昼間の温度は20～25℃、硬化期は15～20℃を目安に、ハウス内の温度管理を行う。育苗後半は極力外気に慣らして徒長を防止する。
- (3) かん水は過湿状態にならないよう適度な回数・量で行う。育苗後半では、夕方のかん水は床土温が下がるので避ける。

2 田植え前後の栽培管理

- (1) 田植期は5月10日以降とし、コシヒカリの出穂早限を8月5日以降とすることで出穂期～登熟前半の高温障害を回避し、乳心白粒や背白粒、基部未熟粒の発生を防止する。
- (2) コシヒカリの平年の㎡当たり籾数が2万8千粒を大きく超える過剰生育地域は、植付株数を1坪(3.3㎡)当たり50株以下、植付本数を1株当たり3～4本とし、土壌分析等に基づき、過剰施肥とならないよう、適切な基肥量の施用を徹底する。
- (3) こしいぶきは植付株数を1坪当たり70株程度とし、基肥に頼らずに莖数を確保する。
- (4) 排水の良いほ場で代かき前の土がよく乾いている場合は、乾土効果による地力窒素の発現が予想されることから、基肥量の減肥や植付株数を減らす等の対策を行う。特に前年に倒伏の大きかったほ場ではこの対策を徹底する。

3 田植え後の水管理

- (1) 活着するまでは、低温や風による植傷みを回避するため、3～4cmのやや深い水管理とする。
- (2) 活着後は水温を上昇させるため水深2～3cmの浅水管理とし、分げつの発生を促す。
- (3) 気温が上昇してワキの発生が多くなる場合は、夜間落水して早朝に再びかん水する。日中は止め水にして水温を上昇させる。

4 雑草防除

- (1) 除草剤は、田植え後の一発処理剤の使用を基本とする。除草効果を高めるため、散布後4～5日間は除草剤の種別に応じた水深を確保する。また、散布後7日間は止水し、落水やかかけ流しはしない。
- (2) 田植え前の初期剤は、代かきから田植えまでの期間が極端に長くなる場合にのみ使用し、除草剤が確実に土壌吸着されるように田植えの7日前までに散布する。代かきから田植えまでの期間が6日以内の場合は、田植え前初期剤を使用しない。
- (3) 植傷みにより活着が遅れている場合は、薬害が発生しやすいので、イネ生育の回復を待って除草剤を散布する。薬害防止のため、異常低温時又は異常高温時には除草剤の使用を避ける。

5 病害虫防除

- (1) 「農作物病害虫雑草防除指針」及び「病害虫発生予察情報」に基づき、発生実態に見合った防除要否の判断と適期防除に努める。農薬の使用に当たっては、登録内容を確認の上、適正に使用する。
- (2) いもち病多発地域におけるコシヒカリBLのいもち病防除は、育苗箱施用剤等による葉いもち1回防除とする。
- (3) わたぼうし等のいもち病に対する抵抗性が弱い品種を作付ける場合や、大豆跡等で生育過剰になることが予想される場合は、予防粒剤を育苗箱又は本田に施用し、葉いもちの発生防止に努める。
- (4) 補植苗が葉いもちの伝染源になるので、補植終了後は速やかに除去する。

6 直播栽培のポイント

- (1) 雑草が少なく、水持ちのよいほ場を選び、播種床が均平になるよう、耕起・代かきを丁寧に行う。
- (2) 雑草管理の観点から、代かきから播種までの期間は4日以内とする。砂壤土等で土壌がしまりやすいほ場では1～2日とする。
- (3) 播種及び出芽までの水管理
 - ア カルパーコーティング
 - (ア) 酸素発生剤(カルパー粉粒剤16)をコーティングした後は、できるだけ早く播種する。数日間保存する場合は、ビニール袋等に入れて乾燥防止に努める。
 - (イ) 播種深は5～10mmとし、播種後は落水状態で出芽させる。ただし、糶が露出して鳥害の危険がある場合は湛水出芽とする。また、落水期間中に好天が続き、田面が乾燥してひび割れが大きくなった場合は、走り水かん水を行う。
 - イ 鉄コーティング
 - (ア) 土壌表面に播種する必要があるため、種子が埋没しない程度の土壌表面の硬さになるよう、土壌条件に応じて落水時期を調節する。
 - (イ) 播種後に落水管理を行う場合は、糶の乾燥や土壌のひび割れが起こらないよう適宜走り水かん水を行う。
- (4) 直播用の一発処理剤は、イネとヒエの葉数を確認して適期に散布する。

【照会先：経営普及課普及指導員(専門技術指導担当)水沢誠一 TEL 025-280-5302】